経済と経営 *30－4* (2000. 3)

〈論　文〉

映画『インヘリト・ザ・ウィンド』について

鵜浦（うのうら）　裕（ひろし）

一　はじめに

例によってアメリカの小さな町の事件から始める。事件は1983年11月，ミズーリ州サウス・セントルイスのメルビル学校区で起きた。公立のオークビル中学校で地学の教員ジェイムズ・ディッカーソンが授業で『インヘリト・ザ・ウィンド』の上映を予告したところ，それを聞きつけた同学校区副教育長ドナルド・C・ホーフェルマンが上映を強制的に中止させたのである。理由は，その映画が歴史記録として不正確でありキリスト教信仰を馬鹿にしているので地学の授業での上映に適さないというものだった。校長のロナルド・ポールも副教育長の決定を支持した。

ディッカーソンは同学校区の教育長トーマス・L・ブレイズに直訴したが受け入れられなかった。そこで地元の教員組合に調停の斡旋を依頼したという。たとえ小さな町の事件であっても，この種の事件は場合によっては憲法問題にかかわる重大事件に発展しかねない。キリスト教徒の立場にたてば，映画上映は特定の宗教に対する差別，信仰の自由の権利の侵害として見えるだろう。逆に教員の立場にたてば，教育委員会による「上映禁止」扱いは言論の自由の権利の侵害になるからである。いずれの側に立つにしても，その主張の根拠は憲法上の基本的権利にいきつく。

この事件の経過と結末については，改めてリポートの機会を設けることにして，本論では上映を禁止された『インヘリト・ザ・ウィンド』という映画そのものを扱うことにする。この映画はいったいどのようなものなのだろうか。そのテーマ，題材，ストーリー，制作者の意図はいったいどのようなものだったのだろうか。また，この映画はどのように鑑賞されてきたのだろうか。

いずれにしても，アメリカの公教育では性教育ならびに生物進化教育が今でも論争のタネになっている。これら2つの教科はキリスト教右派を含む共和党右派と民主党リベラル勢力とが戦う土俵であり，その教え方によってどちらの価値観が体現されるかが決まる。現在，大半の公立学校では避妊，マスターベーション，同性愛をふくむ進歩的な性教育が行われ，生物進化論が事実として教育されている。この状況は現在民主党リベラル勢力が公教育の覇権を掌握していることを示す。ただし生物進化論教育はカンザス州をはじめ中西部諸州でキリスト教右派に押され気味である。要するに，公教育におけるこれら2教科の教育は政教分離のシンボルであり，それをめぐる論争は，単なる教育内容の問題ではなく，アメリカの公教育，しいてはアメリカの公共政策のにおける勢力バランスを示すバロメーターなのである。

二　スコープス事件のフィクション化

さて，このいわくつきの映画はもともと1925年南部の小さな町で起きた事件を題材としてつくられたものである。その舞台はテネシー州のカンバーランド・バレーの小さな町，デイトン，当時はわずか1,800人の田舎町だった。その年の夏，公立高校の若い男性教員ジョン・T・スコープスが逮捕され有罪判決を受けた。「公立学校の授業で，ヒトの進化を教えてはいけない」というバトラー法に違反したためである。同法は，旧約聖書の創世記を文字通り信じている人たちが学校教育から生物進化論を追い出すために成立させた反

進化論州法だった。彼らにとって生物進化論は聖書の権威を否定し，子どもたちの聖書離れを助長するきわめて「危険な」思想だった。逆にスコープスにとって，この州法はまさに言論の自由，思想の自由の権利の侵害だったのである。

この事件については，有罪判決を受けた教員スコープスや彼の弁護士をヒーロー視する見方と，南部の田舎町の人たちの頭のかたさを軽蔑する見方がアメリカ国民のあいだで定着している。科学教育に情熱を燃やす生物学の教員が科学に疎い保守的な人たちの作った法律の愚かさを暴くために自らすすんで被告となり，それに共鳴したリベラルな知識人が彼を助けるために闘ったというふうに解釈されている。言い換えると，この事件は科学 vs キリスト教，進歩主義 vs 保守主義，近代主義 vs ファンダメンタリズムの闘いとして，いずれの対立項においても前者の立場から後者の立場を非難する事件として記憶されているのである。

しかし，このようなイメージは事件を題材につくられた演劇や映画に影響されてできあがったところがある。じっさい，歴史解釈を左右する小説，演劇，映画はほかにも存在する。それはフィクションとして作られたものが後世の人たちによって，いつのまにかドキュメンタリーであるかのように鑑賞されてしまうことから生じる。この事件を題材としてつくられた演劇，映画，テレビ・ドラマも，生物進化論を擁護する弁護側の立場を一方的に支持する事件解釈の定着に大きな役割を果たしてきたのである。

しかし，映画は「スコープス裁判」を題材として作られた最初のフィクションではない。1955 年のジェローム・ローレンスとロバート・E・リーの原作による演劇『インヘリト・ザ・ウィンド Inherit the Wind』こそ，事件の最初のフィクション化であり，映画はむしろその忠実な再現といってよい。ちなみにタイトル・フレイズの「インヘリト・ザ・ウィンド」は，旧約聖書の「箴言」(11：29)から引用されている。

家に煩いをもたらす者は風を嗣業とする者。愚か者は知恵ある人の奴隷となる。

He that troubleth his own house shall inherit the wind : and the fool shall be servant to the wise of heart.

「家に煩いをもたらす者」とは家族に経済的，精神的な負担をかける人のことであり，「風を嗣業とする者」とは無益，無意味なことをする人のことであろう。したがって，映画のタイトルは聖書の創世記の記述を文字通り信じ学校教育から生物進化論を追い出そうとする人々を示す，批判的な比喩となっている。

劇の原作は1950年頃にはできあがっていたらしい。しかしブロードウェイでの初上演は1955年だった。この空白の5年間はアメリカ史のなかで重要な時期に相当する。つまり，原作ができた頃はマッカーシズムという「赤狩り」の嵐が吹き荒れていたのである。

原作の意図を考えると，とても上演できる雰囲気ではなかった。確かに原作は反進化論州法に違反し有罪になった「生物学教員」を美化することで，法による自由の制限を糾弾しようとしている。しかし原作が完成した時期を考えると，スコープス裁判は比喩的なエピソードとして使われているだけで，原作が標的としたのは保守的なキリスト教徒というより，むしろ1950年代前半に吹き荒れた「赤狩り」の嵐そのものである。その意味ではアーサー・ミラーがセイラムの「魔女狩り」を題材に戯曲『坩堝（クルーシブル）』（1950年）を創作した動機と変わらない。

ちなみにミラーの『坩堝』は1957年にシモーヌ・シニョレとイブ・モンタンの主演で，さらに一九九六年にはウィノナ・ライダーとダニエル・デイ・ルイスの主演で映画化されている。

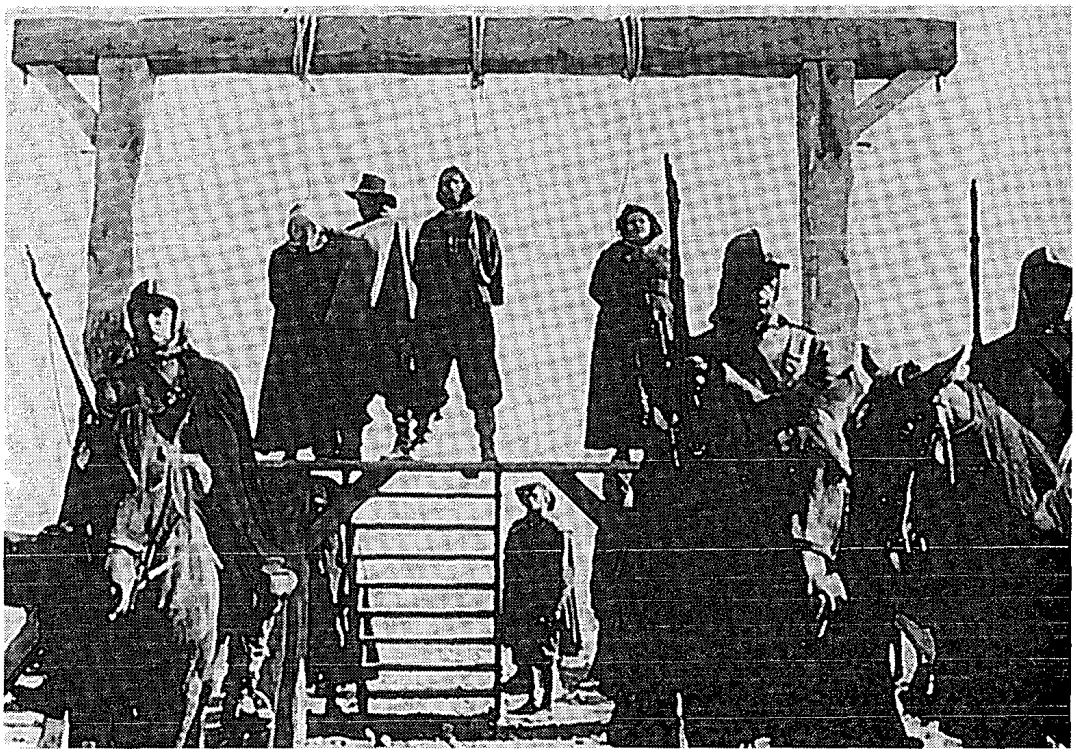
このようにもともとスコープス裁判そのものを戯曲化したわけではないので，『インヘリット・ザ・ウィンド』にはフィクション化がほどこされている。

それは原作者の覚え書きにも言明されていることである。

『インヘリット・ザ・ウィンド』は歴史ではない。1925年の焼けつくように暑い7月，テネシー州デイトンで起きた事件からこの劇が生まれたことは明らかである。しかし，その事件とはまったく別物である。

有名なスコープス裁判のトランスクリプトから借用したフレイズはほんの少しである。劇中にはあの大物どうしの激突に出てきた有名人に関連する登場人物もある。しかし彼らには彼ら自身の言葉と名前がある。

この「モンキー裁判」については，今世紀の偉大なジャーナリス



映画『クルーシブル』のプログラムより

トや歴史家が多くの言葉を残している。そうしたものから私たちは多くを得ている。アーサー・ガーフィールド・ヘイズにはとくに感謝している。彼は記憶と経験を頼りにデイトンの冒険について書かれていないことをたくさん教えてくれた。

デイトンにおけるブライアンとダロウの激突は劇的だった。しかしドラマではない。また，レイ・カウンティ裁判所で二人が衝突してから30年たち，彼らの争点にも新しい次元と意味が生まれている。したがって，『インヘリット・ザ・ウィンド』は事実の記録ではない。演劇である。1925年のことではない。ト書きには「最近のこと」だと書かれている。昨日のことだったかもしれないし，明日のことかもしれない。

フィクション化されているからといって，原作の価値が落ちるわけではない。むしろ，それ故のおもしろさがある。じっさい，それは今日のアメリカの劇場では古典の一つに数えられている。しかも，上演にはときどき事件が伴う。最近では，1995年ニューヨークでトニー・ランドールのナショナル・アクターズ・シアターによって公演されたが，それはちょうどテネシー州議会で再び進化論教育を制限する動きが活発化していたときだった。

また，毎年どこかの学校の学芸会で必ず上演される題目の一つとなっている。しかし，上演を快く思わない人たちもいるので騒ぎの起きる町もある。たとえば，1965年10月ニューヨーク州のある公立学校で上演予定をキャンセルする事件が起きている。ビンガムトンのベスタル高校の校長ウィリアム・B・ミューレンが5人のバプティスト派の牧師の意見にしたがい同校での上演を許可しなかった。校長によると，5人の牧師はその劇が「自分たちの教えに真っ向から反対していること」，また劇中の台詞が聖書の創世記の記述を嘲笑していることを反対の理由としてあげたという。

1960年には，原作が映画化された。スタンレイ・クレイマー監督，スペンサー・トレイシー，フレデリック・マーチ主演によって同じく『インヘリト・ザ・ウィンド』というタイトルで制作された。ちなみに今日では，MGMのホーム・ビデオ（モノクロ）があるため家庭でも楽しめるようになっている。そのほか，テレビドラマも3本作られている。その1つ，1965年ジョージ・シェイファー監督，ホールマーク・ホール・オブ・フェイム社によって制作されたテレビ・ドラマは同じタイトルでNBCから放送された。メルビン・ダグラス，エド・ベグリー・Jr主演であった。1960年の映画版が原作の忠実な映画化だったとすれば，1965年のテレビ版は原作の糾弾の意図を骨抜きにしたものであるといってよい。

原作がつくられた1955年がアメリカ史の重要な時期に相当していたのと同じように，映画化やテレビ・ドラマ化の1960～65年もやはりアメリカ社会が大きな転換を経験した時期である。1965年当時，アメリカはリンドン・B・ジョンソン大統領のもとでベトナム戦争に深く介入し，国民からの批判が高まりつつあった。またこの年をはさみ大きな暗殺事件が起きている。1963年にはジョン・F・ケネディ大統領，1968年にはマーティン・ルーサー・キング牧師とロバート・F・ケネディが暗殺され，国民が大きなショックを受けた時期でもある。さらに，60年代前半から始まった市民権運動がしだいに暴力的となり，つられて女性運動や学生運動なども始まり，現状の改革を求める声がいたるところで噴出していた。

したがって，スコープス裁判のあった1920年代，マッカーシズムの時代，1960年代には共通の特徴がある。一方で保守的な支配層が国家の旧態や自分たちの既得権を守ろうとするが，他方では権利を制限されていた進歩的な世代が将来を展望しながら，急進的な方法で現状を打破しようとする，対立の時代だったのである。

さて，当然の事ながら，これらの劇や映画やテレビドラマが娯楽のためのフィクションとして鑑賞される限り問題はない。しかし事件から70年以上た

ち，事件関係者が亡くなるにつれ，それらはじょじょにドキュメンタリーの役割を果たすようになった。現在では，映画がアメリカ人にこの事件の歴史記録を提供しているようところがある。たとえば歴史教育としても，学生にビデオ映画を観せることで事件の説明に変える授業や講義がたくさんある。そのため冒頭で触れたような事件がアメリカ各地の公立学校で起きている。また，日本でも大学の講義や学会発表で映画から得た知識をもとに，この事件が語られることが多い。

したがって原作者の意図，史実とのちがい，そして事件の解釈に与えてきた影響をチェックしておく必要がある。このチェック作業に向けて，本稿ではまず1960年の映画『インヘリト・ザ・ウィンド』のストリーをできるだけ再現することにしたい。

残念ながらこの映画ビデオには日本語の吹き替えも字幕もない。私の力では台詞の完全なトランスクリプトは望むべくもない。映画の中から重要なシーンをいくつか選び，解説を加えるという方法にとどまることをお許し願いたい。今後の研究資料として，あるいは教材としての意味を少しでも認められれば幸いである。

主な人物名の対応表

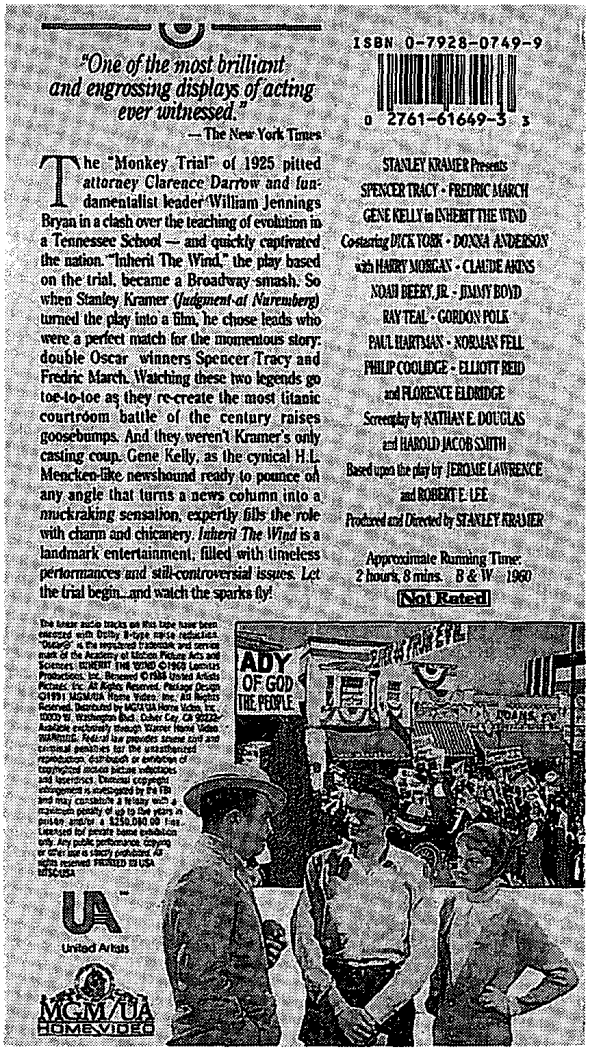
映画の登場人物の名前	役者の名前	実在の人物の名前
バートラム・ケイツ ヒルズボロ高校の教員。授業中にヒトの進化について教えたところ，州法違反で現行犯逮捕され，裁判の結果，有罪判決を受ける。	ディック・ヨーク	ジョン・T・スコープス レイ・セントラル高校の教員
マシュウ・ハリソン・ブレイディ 過去に三度大統領候補になった大物政治家。ファンダメンタリスト。検察側の主任弁護士として，ケイツ先生を追求する。有罪判決を勝ち取るが，裁判の過程で権威を失い，閉廷直後に死ぬ。	フレデリック・マーチ	ウィリアム・J・ブライアン

サラ・ブレイディ マシュウ・ハリソン・ブレイディの妻。	フローレンス・エルドリッジ	メアリー・B・ブライアン ブライアンの妻
ヘンリー・ドラモンド 被告側の主任弁護士としてケイツ先生を弁護する。かつて大統領候補になったブレイディを応援したことがある。リベラル派の敏腕弁護士。	スペンサー・トレイシー	クレアレンス・ダロウ
E・K・ホーンベック 『ボルティモア・ヘラルド』の記者。ケイツのためにドラモンドを雇う。	ジーン・ケリー	H・L・メンケン 『ボルティモア・イブニング・サン』の記者
ジェレマイア・ブラウン 牧師。筋金入りのファンダメンタリスト．生物進化論の道徳的悪影響を恐れ，聖書の創世記の記述の権威を守ろうとする。娘のフィアンセであるケイツを憎む。	クロード・エイキンズ	該当者なし
レイチェル・ブラウン 牧師の娘，ケイツ先生の婚約者。ファンダメンタリストで牧師の父とキリスト教を捨てたケイツとの間で葛藤する。	ドナ・アンダーソン	該当者なし

本稿で使用する予定だったシーンのリスト*

1．ケイツの現行犯逮捕
2．善後策を講じる町の指導者
3．ケイツに面会するレイチェル
4．ブレイディの歓迎
5．レイチェルと父親の口論
6．ドラモンドとホーンベック
7．サルの見世物の
8．ホテルの食堂で再会
9．法廷シーン
10．ケイツとレイチェルの会話

11. ドラモンドとサラ
12. 牧師による集会
13. レイチェルへの尋問
14. 科学者の喚問を拒否
15. わら人形を焼く住民
16. 留置所で怯えるケイツ
17. ブレイディへの尋問
18. ケイツの申し開き
19. ブレイディの死
20. 退廷するドラモンド



映画『インヘリト・ザ・ウィンド』
のビデオ・パッケージ（裏側）

三　映画のストーリー

ある夏の朝，アメリカ南部の小さな町。ヒルズボロ裁判所の正面玄関のシーンから始まる。玄関の上の時計は午前8時をさしている。第1限目の授業が始まる時刻である。BGMとして次のような歌詞が女性のソロでゆっくりと流れる。

> Give me that old-time religion. Give me that old-time religion. Give me that old-time religion. It's good enough for me. It was good for a little David. It was good for a little David. It was good for a little David, and it's good enough for me. Give me that old-time religion.

ビブラート気味の歌い方が嵐の前触れをつげるかのように不気味な雰囲気を醸しだしている。

こぎれいな町並み。ゴミ一つない舗装された道路。検事がヒルズボロ裁判所を出て，町の牧師と合流し，ヒルズボロ高校へ向かう。もちろん同校でヒトの進化を教えている教員バートラム・ケイツを現行犯逮捕するためである。しっかりした足取りには使命感と決意がみなぎっている。同校の玄関で待つ新聞記者を加え，牧師を先頭に総勢5人で胸を張り校舎に入っていく。同じ歌詞がビブラートで流れている。

ケイツ先生が授業で生物進化の説明図を黒板の上に広げ，ヒトの進化を説明しはじめる。ちょうどそのとき彼らが教室に入ってきて，後ろ側を陣取るようにして並ぶ。教室に緊張感が走る。しかしケイツ先生は「Good Morning, Gentlemen!」と挨拶し，何もなかったかのように授業をすすめる。

「今日の科学の時間では，引き続き『ヒトの由来』というダーウィン理論

について講義します。昨日話したように，ヒトは下等な生物から由来しています。最初にくねくね動く原生動物からサルへ，そしてヒトへというように。だからサルみたいなやつがいるのかと思う人もいるだろうね」と発言する。すると後ろから1人がケイツ先生に歩み寄り，逮捕状を読み上げ，彼を現行犯逮捕（シーン1）する。新聞記者がこの事件をスクープしようと，すかさず写真を撮る。

この町では次のような州法が施行されていた。一部または全面的に同州の財源によって運営されている大学，カレッジ，公立学校の教員は聖書で教えられている神によるヒトの創造ストリーを否定する理論を教えること，あるいはヒトが動物の低い段階に由来していると教えることは軽罪に相当し，100ドル以上，500ドル以下の罰金を課することができる。つまり，この町では公立学校においてヒトについて聖書の創造説を否定する理論の教育をいっさい禁止していたのである。ケイツ先生はこの反進化論州法違反で逮捕されたのである。

翌朝，ヒルズボロを嘲笑する各紙朝刊の一面を見ながら，市長をはじめ町の指導者が善後策を協議している（シーン2）。進化論教育をやめさせれば十分でケイツを処罰するのは行き過ぎだと言う者。世間の嘲笑は神がこの町に与えた罰だ，学校も町も信仰を取り戻さなければならないと主張する牧師。私たちは神のために闘っているのだと言う保守主義者。曖昧な態度で自分の立場を濁す検事。法を順守すべきだと言う市長。東部の州と取り引きしたいし子どもを東部の名門大学へ行かせたいけれども，こんな法に基づいて彼を処罰すればどちらもできなくなると言う利己的な銀行家。彼らの議論は決め手がないままに流れていく。そこへ大物政治家マシュウ・ハリソン・ブレイディが検察側に志願するというニュースを載せた新聞が届き，全員の気持ちがケイツ先生の起訴に傾く。「神が助けをよこされた」と天を仰ぐ牧師。「この町はチャタヌーガより大きくなるぞ。泊まるところも必要だし，食事の用意も必要だ」と算段する者。「これでヒルズボロが地図に載る」と思わず呟く

市長。

その晩，逮捕され留置されたケイツ先生を婚約者のレイチェル・ブラウンがたずねる。そのときケイツは看守とトランプに興じていたが，ノックの音に留置所にもどる。そこへ看守がレイチェルを連れてくる。彼女とケイツは抱き合いキスをかわす(シーン３)。「自分の考えを捨てて，あれは間違いだったとみんなに謝ってちょうだい」と哀願する彼女。しかし彼女の気持ちを理解しながらも，ケイツはもはや昔の二人には戻れないことを告げ，彼女に選択をせまる。二人の間に感情的な溝ができる。そこへ『ボルティモア・ヘラルド』紙の記者Ｅ・Ｋ・ホーンベックがリンゴをかじりながら現れ，ケイツに自分の記事を渡す。「美人と生物学者が我らの味方か」と二人をからかう。「あなたの記事か」とただすケイツに「私のタイプライターがヒルズボロの異端者について甘く悲しい歌をつくっただけだよ」と答える。二人を「アダムとイブ」にたとえる一方，自分はエデンの園の「ヘビ」ではないし，かじっているリンゴは「知識の木からもぎ取ったものではないから，安心しろ」と言う。「そんな木はそもそもヒルズボロにはないか」と嘲笑する。

記事を読んで「自分は殉教者みたいだ」と詰め寄るケイツに，ホーンベックは「殉教者には常に真理がある。君もそうだ」と励ます。

ブレイディがヒルズボロに到着した日，町は歓迎パレードを挙行する。その中をブレイディ夫妻はオープン・カーで行進する（シーン４)。歓迎会場に着くと，市長がブレイディについてウィルソン大統領のもとで国務長官を務めたこと，婦人参政権の実現に貢献したことなどを紹介する。オープン・カーのパレードのあとを行進することで婦人団体がブレイディ支持を表明するのはこの理由による。そのあとブレイディは町の牧師ジェレマイア・ブラウン（レイチェルの父）を横に立たせて，演説した。私がここに来たのは信仰道徳を支え無神論が大都市から小さな町の素朴な人々に広がるのを止めるためである。それを止めないと，この町もソドムやゴモラのように罪悪のために神によって滅ぼされてしまう，と。演説の途中で，『ボルティモア・ヘラルド』

紙の記者ホーンベックが同紙は主任弁護士としてヘンリー・ドラモンドを呼んだことを告げ，集まった市民を仰天させる。

その晩，ケイツの婚約者レイチェルは自宅で牧師の父親ジェレマイア・ブラウンと決定的な口論をしてしまう(シーン5)。ケイツと別れるように説得する父にたいし，そのつもりはないと言い切る娘。「なぜ彼を憎むのか」とつめよる娘にたいし，「神を愛しているからだ」と答える父。妻の遺影を見つめながら，聞き分けのない娘の前で泣き崩れる。レイチェルは不可知論，無神論を唱える婚約者とそれを憎悪する父とのあいだで引き裂かれる。子どもの頃から自分の気持ちを理解せずただ支配しようとするだけの父に強い反発を感じる。

翌朝，『ボルティモア・ヘラルド』紙のホーンベック記者が「悪魔さん，ようこそ地獄へ」というジョークで，ヘンリー・ドラモンドの到着を出迎える(シーン6)。大歓迎を受けたブレイディとは対照的に，お祭り騒ぎの市民が誰一人気づかないまま，長距離バスを降りてくる。ところが，ホテルへ向かう彼らを見つけた聖書売りの老人が，「あなたは異教徒か，あるいは罪人か」とたずねる。続いて，いかにも無教養の風貌をした長身の農夫が近寄ってきて「おまえの知ったことではない。帰れ」とののしる。この町では歓迎されていないことを改めて知るドラモンドに，ホーンベックはこの町でまともな人間は一人だけだ，しかもその人は牢屋にいると嘆く。

ホテルへ向かう途中で，2人はサルの見世物に立ち寄る(シーン7)。子供服を着せられ椅子に座ってたばこを吹かすサルのよこで，見世物師は次のような口上を述べる。「ヒトがサルから進化したのではなく，サルがヒトから退化したのです。ご覧なさい，私の横にいるサルはヒトが下品さと獣性のために退化するとこうなるという見本です。獣のような額，にごった目，猫背。神が天国からサタンを使わし，ヒトをこの見苦しい生き物に退化させたのです。これは罪の報いです。よーく見て心に刻んでください。ご静聴ありがとうございます」と。ホーンベックはサルに歩み寄り，「ごきげんいかがですか，

私のおじいさん」と呼びかけ，ユーモアをまじえて「君も証言しにヒルズボロに来たのか」と話しかける。

『ザ・マンション』という名のホテルにたどり着くと，緊張した面もちでヒルズボロ高校の生徒が数人待ち伏せていた。手荒い歓迎を受けるのかと一瞬たじろぐ二人にたいし，高校生の１人が「ケイツ先生を助けてほしい。ぼくらはケイツ先生が好きなんです」と訴えかける。

ホテルのロビーに入ると，２人はブレイディ夫妻，市長のコナー，検事のダベンポートの出迎えをうける(シーン８)。ブレイディとドラモンドの昔を思い出す会話から，ドラモンドはかつてブレイディの大統領選を応援したこと，また市民の政治的権利拡大のために協力し合ったことがわかる。

公判の初日，検察側はブレイディを先頭に拍手喝采の中を法廷に入場する。裁判所の表玄関には「あなたの聖書を読みなさい Read Your Bible」という垂れ幕が下がっていた。対照的に，ドラモンド，ホーンベックの弁護側はブーイングのなかをうつむきかげんに入廷する。法廷では記者たちが開始前の緊張感を本社に打電している。『ボルティモア・ヘラルド』のホーンベック記者は「ご存じのように，昼も夜も軍隊のような汚い信心深い人たちが古びた田舎から溢れ出て，派手な救世主（ブレイディのこと）が怒鳴り散らすのを聞こうと集まっています。「神父さん，こんにちは」とブレイディに視線をやりながら，聞こえよがしに続ける。「２日前に到着してから，マシュー・ハリソン・ブレイディはフライド・チキンと吐き気をもよおす感謝を交互に体内に詰め込んでいます.....」と。傍聴席は満員である（シーン９）

テネシー州の７月は酷暑となるため，ブレイディは裁判長に上着を脱ぐ許可を求めた。許可が出て，上着をとった両雄はお互いシャツ姿となる。ドラモンドの派手すぎて趣味の悪いサスペンダーを見て，ブレイディは「主任弁護士さんは大都市シカゴの最新ファッションでお目見えですか」とからかう。ドラモンドは「よく聞いてくれた。たまたまこれを買ったピーボディ雑貨店はネブラスカのあんたの故郷ウィーピング・ウォーターだよ」と切り返し，

聴衆に受ける。

法廷では，まず陪審員の選定がおこなわれる。第12番目の陪審員を決めるため，ジェシー・ダンロップが証人席に呼ばれる。検察側からブレイディが「いいですか，ダンロップさん。あなたは聖書を信じますか」とたずねる。「私は御言葉とブレイディ氏を信じます」とダンロップが答えると，聴衆から「エイメン」，「ハレルヤ・ブラザー」という声がかかる。弁護側は質問すらせずに，彼を陪審員として認める。質問しても意味はないと判断したらしい。

陪審員選定の作業を中断させて，ドラモンドが裁判長に異議を申し立てる。ブレイディを「閣下 Colonel」と呼ぶのは適切ではない，「二等兵 Private」でもいいのではないか，と。裁判長は，ドラモンドをヒルズボロ到着の時点から一時的に州軍の「大佐 Colonel」に任命することで調停する。続いて，ジョージ・セラーという人物を陪審員として選び，選定作業を終え，裁判初日の幕を閉じる。

その直後，裁判長が「ブラウン牧師からの伝言です。夕方，ピクニック場で祈禱と導きの会合を開きます。ふるってご参加下さい」と告知した。すかさずドラモンドは「そのようなコマーシャルの告知には反対だ。それを告知するなら，生物進化論の会合についても告知してもらいたいものだ。そもそも裁判所に入るには，玄関にかかっている Read Your Bible という垂れ幕の下を通らなければならない。あれを降ろすか，さもなければ大きな字で Read Your Darwin と書かれた看板を立てるべきだ」と反論した。聴衆の中には退廷のさいに，「おまえを懲らしめてやる」，「町から追い出してやる」とケイツをののしる者がいる。

誰もいなくなった法廷で，ケイツとレイチェルが話し合い，ドラモンドとホーンベックがそばで聞いている（シーン10）。

レイチェル：バート，どうなっているか，わかってるの？　あなたは自分の

仲間にたいする武器として使われているのよ。あなたの思想や信念はもうどうでもいいわ。あなたは悪の手助けをしているのよ。

ケイツ：　よせよ。そんな単純な問題じゃない。善か悪か，白か黒か，昼か夜か，という問題じゃないんだ。極地域では，夜明けが6か月間も続くんだ。

レイチェル：私たちは極地域に住んでいないわ。ここはヒルズボロよ。太陽が沈めば暗くなるわ。ところで，あなたがここへ来て違いを見せつけようとしたのはなぜ？

ドラモンド：違いを見せつけるためにここへ来たのではない。彼ら変えようと思ってここに来たんだ。それが重要な点だ。君はどうなのかね，坊や。

バート：　何が重要かなんて，ぼくにはもうわからない。ぼくは子どもたちの心を開こうと思った。彼らはまだ子どもだ。彼らが使えるような知識を授けようとしただけなのに。

ホーンベック：ウソをつくな，ケイツ。どんなヒーローも幻滅から生まれるんだ。

ケイツ：　この先ぼくはどうなる。胸にペイパー・メタルを貼って死ぬのか。

ホーンベック：バート・ケイツ，世界最強のチャンプ，闘いで死ぬ。

ケイツ　：ぼくはあの人にとっては新聞の見出し，あななたにとっては大義名分か。

ドラモンド：君自身にとっては何なんだ。こんなことになったのは，彼のヘッドラインのせいでもないし，私の大義のせいでもない。もちろんあの子たちのせいでもない。自分自身のため，自分の信念のためじゃないか。

ケイツ　：こんなことになるなんて思ってもみなかったよ。これではすま

ないだろう。町の人たちは痩せてガツガツしている。彼らの目はまるで殺人犯を見ているかのようだ。

ホーンベック：君は殺人犯かもね。彼らのおとぎ話を1つ葬り去ったんだから。彼らは神の怒りの雨を降らすだろうよ。

ケイツ　：あなたは何を言っても冗談しかかえってこない。

ドラモンド：バートがつらい目にあっているのはわかっている。世界中でもっとも寂しいと思っているだろう。人気のない通りを自分の足音だけを聞きながら歩いているようなもんだ。しかしそれがいやなら，すべてのドアをノックして言いなさい，中に入れてくれればあなたの言うとおり生活します，あなたの言うとおり考えます，と。そうすれば2度と寂しい思いなんかしないさ。君が決めろ。その一言で私たちは訴訟を取り下げるから。もちろん，州法が正しく自分が間違っていると君が心から信じているならばの話だがね。もしそうなら，私は荷物をまとめてシカゴへ帰るよ.....

レイチェル：私はずっと父の教会へ通ってきたわ。思い出せる限り，すべての日曜日に。この土地が私の生活するところ，私の子どもが生まれるところなのよ。私たちの生活はどうなるの。

ケイツ　：今，ぼくがあきらめたところで2人の人生がどうなるというのだ。君のお父さんのハレルヤと無知はもうたくさんだ。レイチェル，この町で起きていることは他の町のキリスト教とはちがうんだ。お父さんの教会か，ぼくたちの家か，二つに一つだよ。

こう言ってケイツがレイチェルを突き放したところで，看守がケイツを呼びに来た。

その夜，ヒルズボロの名士がホテルのレストランでブレイディのレセプション・パーティを開き，会食している。ブレイディはまわされてきたボー

ルからたくさんのマッシュ・ポテトをとり，列席者の顰蹙を買う。食べながら大声でしゃべる彼は見るからに下品な人物として描かれている。

対照的に，片隅ではドラモンドがサンドウィッチとコーヒーの粗食を1人静かに食べようとしている。そこへサラ・ブレイディが同席する(シーン 11)。2人の会話はかつてブレイディとドラモンドは恋敵でサラはブレイディを選んだことをにおわせる。当時を思い出しながらドラモンドは,「昔にもどりたいね。たとえ彼が立派な大統領になれなかったとしても，ぼくは彼に投票したと思うよ。君を女王にしたい一心でね」と語り，サラを喜ばせようとする。しかしサラはドラモンドを選ばなかった。その理由は思想と信仰のちがいだった。昔も今も信仰を大切にしているサラは，自分の選択にまちがいがなかったと，ドラモンドに告げる。若き日の2人の別れが，今にもこわれそうなケイツとレイチェルの微妙な関係に重なる。

その夜，ピクニック場で牧師が集会をおこなう。留置所のケイツをのぞき，食事を終えたみんなや町の住民が松明かりだけの暗い広場に集まる。彼らにたいし，ジェレマイア・ブラウン師は厳しい調子で説教を始める(シーン 12)。

> 神の言葉を聞け。神の言葉を聞け。神の言葉は言う，世界は6日間で創造された，と。最初，世界は何もない中空だった。そして神は言われた，光よあれ，と。すると，光があらわれた。神は光を見て，これでよいと言われた。神は言われた，大空よいでよ，と。大空があらわれた。そして第3日目に陸地，草，果実のなる木をつくられた。第4日目に太陽，月，星をつくられた。神はこれらを見てよしと言われた。第5日目に獣，鳥，大きな鯨をつくられ，これらすべてを祝福された。第6日目の朝，目覚めた神は目に輝きがなく，憂鬱な表情をしておられた。なぜか？　神は何を悩んでおられたか？　ご自分でおつくりになられたものを見渡されて，まだ十分ではない，完成していない感じられ，そしての

たもうた，ヒトをつくろうと。信じるか？

（聴衆からイエスという答え）

それでは神の言葉を拒む男を呪うか？

（聴衆からイエスという答え）

御言葉に逆らう男に地獄の火をかけよ.....嵐とカミナリの神よ，あの罪人を打ちのめしたまえ。かつてファラオの時代に敵になされたように，彼にもあなたの剣の恐ろしさを知らしめたまえ.....」と。

このようにブラウン牧師は創世記の記述にまちがいがないことを民衆に再確認させる。そしてケイツを呪う牧師の説教に，娘のレイチェルは取り乱し，思わず大声で「やめて」と叫び，泣き崩れる。倒れそうになるレイチェルを支えながら，ブレイディはブラウン牧師をいさめる。家族を顧みない牧師にたいし，ブレイディは聖書の「箴言」第11章29節の前半を引いて諭す。

家に煩いをもたらす者は風を嗣業とする者。

He that troubleth his own house shall inherit the wind.

ただし，ブレイディが口にしたこの一節はやがて彼自身に帰ってくることになる。

翌朝，法廷ではケイツの問題の授業を受けた高校生が証言したあと，レイチェルが検察側の証人として喚問される（シーン13）。ブレイディはケイツが熱心なキリスト教徒ではなく無神論者であることを証言させようとする。スティーブンスという名の13歳の少年の川で溺死したときのことだった。ケイツの教え子だったその少年の魂は呪われるだろう，なぜなら生まれたとき両親が洗礼をしなかったからだと，ブラウン牧師は言った。それに怒ったケイツはキリスト教を捨てた。ブレイディの誘導にかかり，意に反してケイツに

不利な証言をしてしまったレイチェルは証言席で泣き崩れ，証言を続けることができなくなる。ブレイディの尋問が終わったあと，弁護側は反対尋問を放棄した。

傷ついたレイチェルは悩んだ末，父，尊敬していたブレイディと決別する決意をする。後の展開からブレイディはレイチェルをだまして証言させたらしいことがわかる。

弁護側は証人として科学者を喚問しようとした。弁護側は生物進化論の専門家として動物学者や地質学者をわざわざ都会からヒルズボロまで招いていたのだ。シカゴ大学動物学部長エイモス・ケラー博士，オバリン大学教授(地質学，考古学）かつ会衆派教会の牧師アラン・ペイジ博士，人類学者かつ哲学者かつ作家のウォルター・ハリソンなど，数名の学者が居並ぶ(シーン 14)。

しかし判事は弁護側の証人要請を却下する。この裁判の争点はケイツが反進化論州法に触れたかどうかであって，州法自体ではない。したがって，生物進化論の専門家の知識はこのさい不要であるというのが理由である。

この判定にたいし，ドラモンドは次のように食い下がる。「これらの動物学者，地質学者，考古学者，人類学者は生物進化論を詳しく説明できる最適の人たちだ。ヒルズボロの単純な人たちは彼らに偏見をいだいている。彼らの教養に圧倒され，劣等感を感じているのではない」と。「この町は世界の恥だ」とドラモンドは怒鳴る。しかし判事の裁定は変わらない。

その夜，住民はケイツのわら人形を焼きながら町を行進し(シーン 15)，留置所の窓から覗くケイツに向かって投石する。『ヒズ・トゥルース・イズ・マーチング・オン』のメロディーにあわせて，「バート・ケイツをすっぱいリンゴの木に吊せ」という意味の替え歌を歌う。

We'll hang Bert Cates to a sour apple tree!
We'll hang Bert Cates to a sour apple tree!
We'll hang Bert Cates to a sour apple tree.....!

Our God is marching on.
Glory, Glory, Halleluyah.....

住民の行動に，留置所で怯えるケイツ（シーン16）。

翌朝，科学者を喚問できなかった弁護側はブレイディを聖書の専門家として喚問する。ドラモンドは厳しい質問を次から次へと繰り出す（シーン17）。ヨナが大きな魚に飲み込まれたのは本当か。ブレイディは「ありうることだ」と答え，聖書の記述をそのまま信じていることを示す。ヨシュアが太陽を静止させたのは本当か。大陸はなぜぶつからないのか。これらの質問にも，ブレイディは自然法則は神の摂理であるから，彼の思いのままに改廃できると答える。

カインの妻はどこから来たのか。「創世記」の人々はいったいどこから来たのか。遠い地方で別々に創造されたのか。ブレイディは人々は生殖を始めたと答える。セックスによって生まれたというのか。セックスは原罪ではないのか。これらの人々は原罪から生まれたのか。ブレイディはしだいに答えに詰まる。

ドラモンドは創世記について質問を始める。ブレイディは神による創造が「アッシャー司教によれば，B.C. 4004年の10月23日，午前9時」だと答える。しかし，ドラモンドは創造の1日が25時間だったかもしれないと詰め寄ると，「そうかもしれない」と答える。すかさず「40時間だったかもしれない，1週間，1か月，1年，百万年かもしれない。どうしてわかる」と詰め寄る。「神が自分に教えてくれる」と答える。この答えで聴衆は落胆する。つまり，ブレイディが創世記の1日は24時間よりも長いと考えており，しかもそれは神が教えたことだという。つまり，彼は聖書の言葉を文字通り解釈するファンダメンタリストの掟を自ら破ったことになる。ブレイディの権威はつぶれる。

翌朝，ドラモンド，ホーンベック，レイチェル，ケイツの弁護側，ブレイ

ディ，検事の座る検察側，そして聴衆が待つ法廷に陪審員が入場する。レイチェルは生娘を思わせた以前の服装から，帽子にワンピースを装う。その姿には成長し独立した女性の表情があらわれている。

「全会一致で有罪と認める」と陪審員による評決が下る。それを受けて，判事はケイツを正面に呼び出し，言いたいことがあるかとたずねる。ケイツは次のように述べる。「判事，私は演説家ではありません。ここ数日間みんなが聞いた人たちの雄弁さは，私にはありません。私は一介の教員です（聴衆から，もう教員じゃないぞ，と声がかかる）。私は一介の教員でした。私が違反した法は不当だと思っています。私はこれまで通り将来もあらゆる方法でこの法律に反対し続けます」と。控訴の意志を表明する（シーン 18）。

判事が判決を下す。彼は法に反したが，今までこの法に違反した前例はなく，刑罰の前例もない。したがって，罰金 100 ドルを申し渡した。

前日の喚問で恥をかいたブレイディは権威奪回のために最終弁論を用意していたが，その機会を認められない。しかし閉廷後に演説しようとするが，それに耳を傾けようとする人はいない。「エスキモー・パイ」というアイスクリーム売りが法廷を歩き回る。その惨めな姿にドラモンドは同情の目を向ける。失意の中，ブレイディは前のめりに倒れ，そのまま死ぬ（シーン 19）。

ブレイディの死に微塵の同情をも示さぬホーンベックは電話でブレイディは「食べ過ぎ」で死んだと本社に伝えている。死亡記事のお悔やみの言葉を思案し，ブレイディが牧師をいさめたときに使った聖書のフレイズがいいと思ったが，その言葉を思い出せずにドラモンドに聞く。「家に煩いをもたらす者は風を嗣業とする者。愚か者は知恵ある人の奴隷となる He that troubleth his own house shall inherit the wind: and the fool shall be servant to the wise of heart.」と教え，ドラモンドは自分も聖書の「箴言」第 11 章 29 節を全部覚えていることを示す。驚いたホーンベックは，ドラモンドを偽善者だと非難する。ドラモンドはブレイディと同じくらい聖書に詳しいことを披露することで，彼は科学や思想を大事にする個人の自由な思考と信仰は両立す

ることを強調する。左手に鞄を携えて1人で退廷する彼が右手に持っていた2冊の本は『聖書』と『種の起源』である（シーン20）。

参考文献

Abbott, Jeff, 『図書館の死体』（佐藤耕士訳），ハヤカワ文庫，1997年.

『図書館の美女』（佐藤耕士訳），ハヤカワ文庫，1988年.

Gould, Stephen Jay, "William Jennings Bryan's Last Campaign," *Natural History*, November 1987, pp. 16－26.

http://xroads.virginia.edu/" UG97/inherit/contents.html

"Background : The Scopes 'Monkey Trial' —— 1925"

"Inherit the Wind Makes a Broadway Entrance —— 1955"

"Inherit the Wind Comes to Hollywood —— 1960"

"Inherit the Wind on the Small Screen —— 1965"

"Inherit the Wind in Our Times---1980 s-Present"

"Endnotes"

Iannone, Carol, "The Truth about Inherit the Wind," *First Things*, no.70, February 1997, pp. 28－33.

Mather, Kirtley, F (1888－1978, a member of the Sccopes defense team), "The Scopes Trial and Its Aftermath," *Journal of the Tennessee Academy of Science,* vol. 57, no. 1, January 1982, pp. 2－9.

McElhaney, James W, "The Trial of Henry Sweet : Clarence Darrow Confronts the Issues of the Day," *ABA Journal*, July 1992, pp. 73－4.

Menton, David N, "Inherit the Wind : A Hollywood History of the Scopes Trial," *Contrast,* Jan-Feb 1985, pp. 1－4.

"Inherit the Wind : An Historical Analysis," *Creation*, vol. 19, no. 1, Dec 1996 -Feb 1997, pp. 35－8.

Miller, Arthur, 「るつぼ」，『アーサー・ミラー全集 II』（菅原卓訳），早川書房，1972年，pp. 131－338.

『アーサー・ミラー自伝』，上・下，倉橋健訳，早川書房，1996年.

Rudd, Judson, "Letter to the Editorial," Dayton Herald, 28 July 1960 (following the premier of Stanley Kramer's film *Inherit the Wind*, in Dayton and was

reprinted 13 January 1963, following the nationwide release of the film on television).

"*Inherit the Wind* : A Critical Analysis, 1960," Dayton : Bryan College, March 1963.

Scopes, Jack (John Scopes' grandson), "The Man Who Put the Monkey on Dayton's Back," *Chattanooga Life & Leisure*, vol.5, no. 3, July 1989, pp. 12－3, 15, 19, 21, 24.

St. Louis Post-Dispatch

Little, Joan, "Man Fighting School Use of Evolution-Trial Film," 7 January 1985.

"Mehlville Teacher Wins ; Evolution Movie Is Shown," 21 January 1985.

Mosley, Jim, "Scopes Film Fight Evolves into Great Oakville 'Trial'," 15 February 1984.

"Arbitrator Favors Showing of 'Inherit the Wind'," 16 February 1984.

"Showing of Evolution Film at School Backed," 17 February 1984.

"Mehlville Panel to Edit Evolution Film," 3 July 1984.

"Movie on Evolution OK'd for Classroom Use," 9 August 1984.

鵜浦　裕「創造論の洪水におぼれるか，進化論」，東京大学出版会，『UP』，第239号，1992年9月，pp. 1－5.

「州立サンフランシスコ大学ケニヨン事件――宗教教育と学問の自由――」，札幌大学紀要『札幌大学総合論叢』，第4号，1997年10月，pp. 33－58.

「創造か進化か――アメリカの小さな町の教育論争，ヴィスタ教育委員会1992－94――」，札幌大学文化学部紀要『比較文化論叢』，第1号，1998年3月，pp. 117－174.

「ビル・ホーニッグ――アメリカ"創造vs進化"論争における第2のスコープス？――」，札幌大学紀要『札幌大学総合論叢』，第5号，1998年3月，pp. 1－28.

「創造科学大学院プログラム州認可取り消し事件――カリフォルニア州教育局vs創造研究所1988－92――」，札幌大学経済学会『経済と経営』，第28巻，第4号，1998年3月，pp. 41－78.

「アメリカの創造論運動小史――1920年代？1980年代――」，札幌大学文化学部紀要『比較文化論叢』，第2号，1998年7月，pp. 189－214.

"Hiroyuki Kato : A Social Darwinist Approach to the Emperorship in Modern Japan,"札幌大学経済学会『経済と経営』，第29巻，第2号，1998年9月，pp. 59－

78.
『進化論を拒む人々 —— 現代カリフォルニアの創造論運動 ——』, 勁草書房, 1998年11月.

なお, 映画の台詞の聞き取りについてはニック・シェイドル氏の協力を得たことを記しておく。彼は交換留学制度（1998年度後期）を利用し, インディアナ州のボール州立大学から札幌大学外国学部を訪れている学生である。

＊本論で使用する予定だった映画のシーンについては, MGM社に何度か使用許可を求めたが, 結局回答がなかったため, 掲載を断念した。